

結 論

われわれは、シャトーブリアンが生まれる直前、18世紀に革新された「自然」の概念を出発点として、この作家をはぐくんだ文化的土壌を検討し、若木となったシャトーブリアンによる『革命試論』のなかに、束縛を嫌い、時として無政府主義的な、自由を求める彼の生来の気質とともに、フランスで進行中の革命を正しくとらえようとするあまりに、懐疑論者となっている姿を見た。つぎに、文学者として立派な樹木となったシャトーブリアンが、豊穡なるフランス文学においてさえ、なお傑作が生まれていない分野、叙事詩において名を残そうと奮闘した『殉教者たち』を通して、文学における伝統の継承と、新しい時代にふさわしい表現の自由との融合を明らかにした。さらに、『殉教者たち』を含めたシャトーブリアンのフィクション作品群に現れた、「個の自由」と祖国への帰属精神との葛藤を明確にしたうえで、文学執筆のあとに彼が向かった先、歴史家そして政治論客としての活動のなかで、社会制度の根幹にかかわる「自由」をいかに重視して闘ったのかを見た。この世のすべてのものに平等に訪れる死が、老木となった彼のもとに訪れた時、彼から立ち上った芳香とは『墓の彼方からの回想』であるといえよう。

シャトーブリアンは、専制政治に対して抵抗し続け、言論の自由を何にも増して大切に考えていた。したがって彼の文学的テキストには、18世紀以来の「自然な感情の発露」が自ずと現れ、それがいわゆるフランスのロマン主義文学の先駆者としての彼を決定づけたのであった。ところがその一方で、古くからの貴族階級に属する人間の矜持を、彼は死ぬまで抱き続ける。『墓の彼方からの回想』において、アメリカ旅行中の青年シャトーブリアンがルイ16世のヴァレンヌ逃亡事件の記事を見つけ、それと同時に、亡命貴族とフランスの王族の旗のもと、軍の将校たちが集まっていることを知った際に感じた衝撃の様子が以下のように語られている。

Une conversion subite s'opéra dans mon esprit : Renaud vit sa faiblesse au miroir de l'honneur dans les jardins d'Armide ; sans être le héros du Tasse, la même glace m'offrit mon image au milieu d'un verger américain. Le fracas des armes, le tumulte du monde retentit à mon oreille sous le chaume d'un moulin caché dans des bois inconnus. J'interrompis brusquement ma course, et je me dis : « Retourne en

France. »

思いがけない回心が私の心の中に起こった。それはリナルドがアルミーダの庭で名誉の鏡に自らの弱さを見たようなものだ。私はタツソの主人公ではないけれども、同じ鏡がアメリカの果樹園のただ中で私の姿を私に映し出した。武器がぶつかり合う大音響、人々の喧騒が、人知れない森の中にひっそりとたたずむ水車小屋にいる私の耳元に鳴り響いたのだった。不意に私は行程を中断し、自らにこう命じた、「フランスに戻るのだ」。(M.O.T., t. I, Livre VIII, chapitre 5, p. 413.)

あらゆる束縛からの解放を求める気質である一方で、上のように、家族、民族、国家の一員としての責務を重んじ、帰属する集合体の持つ伝統を守ろうとする強烈な使命感を備え、革命の暴力性を目撃したことで、人間の情念を抑制なしに発散することに対して恐怖や嫌悪感も抱いていた。シャトーブリアンには両極端の価値観が共存しているのである。すなわち、新しい時代の息吹を感じさせる自由への渴望と、先祖から引き継いだ名誉と義務、ノブレス・オブリージュである。彼は自らの物語作品のなかで、自らの心から自由に湧き出てくる感情（それはしばしば禁じられた相手への恋情の形をとることになる）と、先祖や祖国への義務との間で悩み、回心を迫られる人物を自らの分身として描いているのである。

最晩年の『ランセ伝』において、シャトーブリアンは今一度、恋人の突然の死をきっかけに新たな人間に生まれ変わるテーマに取り組む。主人公ランセの、修道院長としての冷徹なまでのこの世からの離脱、回心を導くのは、シャトーブリアンの他のテキストと異なり、先祖の命令や師の教えではない。そこではマルゾリエのランセ伝の一節が引かれ¹、親しい人々の死を前にしても、「恐ろしい空虚」で心が占められ「無感覚」であることに衝撃を受けたから²と一応の説明がされる。しかし、実際には黙して語らなかったトラップ修道院長について、「ランセの沈黙は恐ろしい」ものであり、「彼は人生丸ごと墓場に持って行

¹ *Vie de Rancé*, p. 269 : « Sources de Chateaubriand », シャトーブリアンが『ランセ伝』執筆の原資料とした伝記のひとつに挙げられている。Marsollier (abbé Jacques de), *La vie de Dom Armand-Jean Le Bouthillier de Rancé, abbé régulier et réformateur du monastère de la Trappe*, Paris, Jean de Nully, 1703.

² *Vie de Rancé*, p. 63 : « Un vide affreux, [...], occupait mon cœur toujours inquiet et toujours agité, jamais content. Je fut touché de la mort de quelques personnes et de l'insensibilité où je les vis dans ce moment terrible qui devait décider de leur éternité. Je me résolus de me retirer dans un lieu où je pusse être inconnu au reste des hommes ».

ってしまった。このような人物を前にしては身震いしてしまう³」と、シャトーブリアンはランセの回心を理解しえなかったことがうかがえる。

このようにシャトーブリアンには自然と湧き上がる人間の情念を消し去ることは不可能であり、この世に存在するものに課せられた儚い運命に対峙してしばしば空虚感にとらわれることがあったが、父祖から継承した貴族の名誉心から祖国を憂え、自らを奮い立たせ社会制度としての言論の自由を守ろうと闘った。その美しい文章ゆえ「魔術師」とまで言われた作家から、ペンの決闘家へと大きく変貌したかに見える彼の人生という樹木の内奥には、自由への渴望という樹液が脈々と通っていたのである。

³ *Vie de Rancé*, p. 62 : « le silence de Rancé est effrayant, [...] Rancé ne dira rien, il emportera toute sa vie dans son tombeau. Il faut trembler devant un tel homme ». なお、下線部は初版(1844年5月18日)にはあったが第二版(1844年7月13日)での世俗的すぎると指摘を受けた表現の見直しで削除された。(*Vie de Rancé ; Œuvres romanesques et voyages I*, édition de Maurice Regard, Paris, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1969, p. 1023, « Indications bibliographiques », p. 1365.)